

三多摩地域社会教育史の研究
—「自分史」の源流に関する検証—
概要書

川原 健太郎

三多摩地域社会教育史の研究―「自分史」の源流に関する検証―

概要

1 本論文の目的

本論文は、明治維新以降の東京西部・三多摩における地域社会教育の歩みを、「自分史」の表現活動という視点から検証し、「自分史」の源流を明らかにすることを目的とする研究である。「自分史」とは、書き手が自らの生きてきた来歴を書き、自身の人生の歩みを振り返り文章に残す実践であるが、単に自分の歴史を書くだけのものではない。自らの暮らす地域、あるいは自分の生きている社会を認識するなど多面的意義がある成人の学習活動である。そうしたことから「自分史」は社会教育実践の代表的なものの一つとして位置づけられ、1980年代以降に多くの作品が生み出されてきた。本研究では、このような「自分史」の源流に関する検証を行っていく。

近年、執筆ブームとも言われる「自分史」であるが、その原型は、三多摩南西部に位置する八王子の実践家・思想家・教育家である橋本義夫により1960年代後半頃に創始された庶民の文章運動「ふだん記」であるといわれる。「ふだん記」は、ふだん着のように飾らない文章を書き、読みあい、対面や手紙により交流を深める文章執筆運動である。「ふだん記」の活動において、書き手は自らの来歴や日常を書く。「ふだん記」はまさに日本が戦後、高度経済成長を遂げていく中で、約50年にわたって庶民の文章運動として多くの書き手の思いを受け止め発表する場となってきた。

橋本は現在の八王子市域に生まれ、徹頭徹尾、三多摩に生きた人間である。橋本は三多摩での多様な学習・文化活動の遍歴から「ふだん記」を着想し実践した。その後多くの知己の協力や賛同を得て、現在「ふだん記」は、三多摩はもとより全国に広がる運動となっている。

「ふだん記」の発祥の地となった三多摩は、東京都の西部に位置する旧北多摩郡、西多摩郡、南多摩郡の地域の総称であり、現在の東京都の区部と島嶼を除いた地域にあたる。三多摩は、東京特別区という全国有数の都市部に隣接する郊外であり、東京のベッドタウンとして多くの人の流入があり、農村から都市近郊への変貌を遂げてきた地域である。三多摩は明治期においては自由民権運動が隆盛し、大正期から昭和期にかけては青年の学習・文化活動が活発に展開されていた。また、日本の戦後社会教育史の中では国立公民館

の取り組みや、いわゆる「三多摩テーゼ」(東京都教育委員会「新しい公民館像をめざして」1973年)が出されるなど、三多摩における学習実践が全国的に注目されてきた状況もある。

本研究では、近現代の三多摩での学習・文化活動を分析しながら三多摩の地域社会教育をとらえ、「自分史」の源流に迫るが、中でも本論で注目するのは人々が文章を執筆する活動である。例えばこれまでも三多摩では「ふだん記」以前に同人誌、機関誌、新聞投書などの書く実践が豊富に展開されており、「ふだん記」や「自分史」発展の背景を探るためにも重要と思われる。また、近現代の三多摩で展開されてきた草の根の学習・文化活動を社会教育実践に位置付ける上で、本論文では人々の学びの側面に着目し、人々がなぜ自分のことを書こうとするのかという、人間に内在する学習意欲の描出に留意したいと考えている。

社会教育実践の幅は広く、これまで戦後社会教育史の歩みにおいて婦人学級、青年学級、公民館の講座など、組織的な社会教育活動が豊かに展開され注目されてきた¹。一方で、「ふだん記」のように草の根の学習・文化活動の中には、等閑視されてきたものも少なくない。しかし、「ふだん記」の実践は、まさしく社会教育実践の範疇に加えるべきものであろう。

以上に鑑み、本論文では三多摩地域に軸足を置き、明治維新以降約 150 年に亘る時代の中で繰り広げられてきた多様な草の根の学習・文化活動の水脈の上に「ふだん記」が生まれ、これを受けて「自分史」の活動が展開されていったとする仮説を立て検証する。そして、明治維新以降の三多摩における地域社会教育の歩みを、「自分史」の源流という視点から研究し、「自分史」が社会教育の観点から見ていかなる意味を有するのかを歴史的な文脈から検討していきたい。

2 分析の視角

本論文の分析の視角は以下の通りである。

第一に、本研究は三多摩地域における学習・文化活動を、社会教育史の文脈に位置づけ、とりわけ社会教育実践史として描くことにある。

社会教育実践の含意は幅広く、社会教育学においても明確な定義はなされてこなかった。しかし、学習活動を通観すると、人々の学びに向かう意欲や、それを支えようとする人々の姿が存在している。そこで、本研究では社会教育実践を、社会において展開される人間相互の学び合いや成長に関わる学習活動と広くとらえたい。

その意味で「ふだん記」には自らの来歴を知り、書くことによる自己教育だけではなく、

他の文友の書いた「自分史」へ共感することによるお互いのエンパワーメントなど、さまざまな社会教育実践の要素が含まれている。しかしながら「ふだん記」の広がり大きさに比して、社会教育研究の中で取り上げられることはほとんどなかった。このため、橋本は「忘れられた思想家」、「忘れられた教育家」でもあった。なお、研究されて来なかったのは、史料的な制約に加え、従来の社会教育研究においては、一般的に公民館の活動といった公的社会教育に研究の重点が置かれてきたことに起因している。

「ふだん記」には無数の草の根の声が綴られているが、多くの文章がこれまで研究面では未着手となってきた。これらを発掘し検証することで、戦後社会教育像の新たな側面を解明し、三多摩における地域社会教育史に新たな角度から示唆を与えたい。

第二に、本論文では、とりわけ文章を書くといった自己表現の実践に重点をおいて論じる。「自分史」を書く行為は、書き手の内に潜在してきた思いを表出することを意味する。「自分史」は必ずしも歴史の表舞台に描かれてくることのなかった草の根の人々が、自ら見つめ書き残し人生の証を後世に伝えようとする意欲の発露である。また、「自分史」を書く人々や、「自分史」を書くことを励ます人々はいかようにして生まれたのかということは、「自分史」の成立に関わる疑問として浮かび上がる。

そこで本論文においては、人々がなぜ書くことを通じての自己表現へ向かうのか、そこに介在するのはどういったファクターかという分析の視角から論を進め、その上で、三多摩地域における「自分史」を中心とした草の根の学習・文化活動を検証し、地域社会教育実践史として描いていく。「自分史」の源流の検証は、人々が文章を書くことによる自己表現において、社会教育がいかに歴史的に重要な役割を果たしてきたかを提示してくれるものと思われる。

第三に、本論文での考究の対象は、いわば公的な社会教育活動ではなく、むしろ草の根の社会教育実践ともいえるべき学習・文化活動である。公的社会教育の法的な定義（社会教育法第二条）では、「学校教育法（昭和二十二年法律第二十六号）又は就学前の子どもに関する教育、保育等の総合的な提供の推進に関する法律（平成十八年法律第七十七号）に基づき、学校の教育課程として行われる教育活動を除き、主として青少年及び成人に対して行われる組織的な教育活動（体育及びレクリエーションの活動を含む。）をいう」と定義されている。本論文は近代以降の三多摩における草の根の地域社会教育史を跡づけようとしており、行政の範疇で実施される公的社会教育とは異なる領域を論じていく。広く社会における人間の学びは、近世からも継承されてきたのであり、三多摩では多様な学びが展

開されてきたものとして把握したい²。

3 先行研究と本研究の意義

「自分史」の源流として三多摩の社会教育史を検証するために、主たる先行研究をその分野ごとに提示しておきたい。

①社会教育史研究、社会教育実践研究

宮原誠一は「社会教育本質論」において、非歴史的な立場からは社会教育の本質を理解することができないと社会教育を歴史の観点から明らかにすることの重要性を述べている³。宮原は、歴史的把握の上に立って社会教育の発展過程を明らかにする必要性を論じており、同論考は日本の社会教育史研究の基盤の一つとなる重みをもつ。

松田武雄は、近代日本の社会教育思想の成立過程を明らかにすることで社会教育における近代の諸相を描き、近代日本社会教育史像の再解釈につとめている⁴。近代日本社会教育を通観した上で、戦後に通じる理論、制度、思想などを見出す意義のある研究であるものの、草の根の社会教育実践はその研究範囲となっていない。

また大槻宏樹は、日本の近代における教育観の形成に疑問を投げかけつつ、自己教育論の視角を軸にした近代日本社会教育史を論じている⁵。その主眼は近代日本の自己教育論を明らかにすることに置かれている。

このように近代社会教育史に関しては一定の積み重ねがなされてきたが、現代史を論じた研究は少ない。現代における重要な社会教育実践である「自分史」の源流を探求するにあたり、近代から現代への接続を意識しつつ、近現代史として論じる研究は未だ研究途上にある。

一方、社会教育実践を中心課題の一つに設定している研究では、社会教育基礎理論研究会編『叢書 生涯学習』のシリーズがある⁶。同叢書は多様な社会教育実践を通史も意識しながら論じている。一方、国土社から刊行されている「社会教育実践双書」シリーズでも、社会教育実践を対象にしている⁷。

またタイトルに社会教育実践を掲げた研究としては、〈月刊社会教育〉に連載された戦後社会教育実践史をまとめた『戦後社会教育実践史』を挙げることができる⁸。1946年から1969年までの24年間の第一期(1945-48年)、第二期(1949-53年)、第三期(1945-59年)、第四期(1960-1969年)に区分しつつ、全48点の実践が紹介されている⁹。それぞれ占領と戦後社会教育の抬頭(第1巻、第一期及び第二期)、官僚統制と社会教育の発展(第2巻、第三期)、

開発政策に抗する社会教育(第3巻、第四期)がテーマになっており、数多くの実践が紹介されている。例えば第一期(1945-48年)では公民館運動、青年夜学会、生活記録運動、うたごえ運動が対象にされている¹⁰。ただし、社会教育実践の広さを鑑みると、研究対象となっていない実践も少なくないことが課題であった。

②「自分史」研究

「自分史」を書き記す過程には文章を書く、自らの歴史を社会の中で位置づけ省察する、他の人に読んでもらい自らの歴史を知ってもらうなど、相互に自分史を読み合うといった複数の学びの要素が含まれており、関係する先行研究の分野は多岐にわたっている。

色川大吉『ある昭和史—自分史の試み』(1975)は、自身の十五年戦争における個人史とともに、橋本の足跡を検証しながら「自分史」について論じており、本論考の出発点となった研究である¹¹。また小林多寿子『物語られる「人生」—自分史を書くということ』(1997)は、80年代以降に積極的に執筆されてきた自分史について、ともに書く自分史、物語産業から生まれた自分史といったいくつかの系譜や潮流を明らかにしながら、全体像を明らかにしようとした研究である¹²。

さらに、社会教育においては、戦後、自分のことを書く実践が積極的に取り組まれてきた。戦後における書く実践の取り組みでは、1950年代における生活記録・共同学習があり、1960年代後半には「自分史」の原型といわれる「ふだん記」が創始される。1980年には鈴木政子による母の戦争体験を綴る『あの日夕焼け—母さんの太平洋戦争』が上梓される¹³。こうした「自分史」運動が広がりつつある状況下、社会教育において「自分史」は、どのように位置づけられてきたのだろうか。

『成人の学習としての自分史』(横山宏編著、「社会教育実践双書」シリーズ、1987年)は、社会教育実践における「自分史」学習に着目し研究の端緒を開いた意味で、大きな足跡を残した¹⁴。横山は「つねに時代や社会とのかかわりの中で自らを客観化し、その姿をしっかりと捉えておくことは不可欠のことであって、その素材としての自己の歩み＝自分史＝がもつ意義は極めて大きい¹⁵」とし、「自分史」に対する着目を述べる。他にも、同書では成人学校での自分史講座の学習実践や、高齢者教室の文集の実践、女性と自分史学習なども取り上げている¹⁶。成人、高齢者、女性と異なる書き手が主体となっているが、実践を通じて多様な人々が学ぶ姿が描出されている。

こうした状況を受け、1990年代の社会教育関連の雑誌では、社会教育分野における「自分史」の実践に着目した論考が少なからず取り上げられている¹⁷。ただし、現在進行形で

われている実践の紹介がその中心となってきた。

近年の社会教育研究において識字との関わりから「自分史」を論じた研究として、添田祥史は、自分史学習に関して人間の主観を含めた全体像としてとらえるナラティブ・アプローチからのモデルを提示し、「自分史」による識字教育方法の可能性を示している¹⁸。中澤智恵は生涯学習の分野における学びの方法として、書くことを紹介している。そこでは「自分史」を書くことを、学習メディアによる学びの方法ととらえている¹⁹。

このように既存の社会教育研究において、書くことは成人の学びの方法としての意義を見出され、その実践過程で作成された記録とともに評価されてきたことが伺える。そして、「自分史」を学習の方法としてとらえ、その観点から「自分史」の書き方や自分史学習グループの実践内容が論じられており、こうした流れは、いわゆるオーラル・ヒストリーに着目した成人の学習の流れにも通じている²⁰。しかしながら、「自分史」を社会教育における歴史的文脈に位置づける試みは、なされて来なかったこともまた伺える。

③「ふだん記」及び橋本義夫研究

橋本研究は、1974年に雑誌〈中央公論〉に掲載された色川大吉による「現代の常民—橋本義夫論」がその端緒である²¹。色川は、地域文化運動に取り組み、失敗と挫折を経ながら建碑運動に注力し、さらに「ふだん記」運動を興すというその生涯において常民と向き合っていた常民、橋本の半生を取り上げながらその精神史を振り返り、半生を高く評価している。同論考は、八王子にて地域文化活動に取り組んできた橋本の存在や「ふだん記」を広く知らしめることとなり、「ふだん記」に対する多大な注目を集めるとともに、その後の橋本義夫研究につながる端緒となった。

橋本の先行研究には、「ふだん記」に至るまでの思想遍歴をテーマとした小倉英敬による研究がある²²。小倉は、橋本の「ふだん記」以前の思想遍歴に着目した。一方で、橋本の「ふだん記」運動を通じての思想的展開は、依然解明を待たれる状況にあるといえよう。

橋本義夫という人物に関する先行研究としては、義夫の子息である研究者・橋本鋼二による研究『万人に文を 橋本義夫のふだん記に至る道程』を挙げられる²³。本書は、自身では人生の遍歴をトータルにまとめ上げた自伝を出さなかった義夫の伝記でもある。「ふだん記」の萌芽の背景に迫るためにも意義が深い。

小林多寿子は「ふだん記」を社会学の観点から分析した²⁴。報告書には「ふだん記」に関わる資料編が収載されており、「ふだん記」作品所蔵リスト、五十音順執筆者一覧、さらに創刊号執筆者の文章一覧等は、「ふだん記」研究の貴重な土台となっている。

小林は「書く実践と自己のリテラシー」の中で、どのように自己の関心や自己の形成がなされたのか、技術と方法に着目する〈自己のテクノロジー〉の観点から「ふだん記」の研究をおこなっている²⁵。ライフ・ヒストリー研究の第一人者である小林が橋本義夫研究の重要性に着目していた事実は、「ふだん記」の研究価値を示すものといえる。

④民衆史研究、民衆文化研究

本論文は、草の根の人々に光を当てた、色川大吉、柳田國男、北田耕也らによる民衆史、民衆文化の研究に多大な示唆を得た。

色川大吉は『民衆史—その一〇〇年』など、民衆史の研究に多くの足跡を残している²⁶。色川の民衆史ではオホーツク民衆史講座にも言及し民衆史の視点を提起し、三多摩における事例には、千葉卓三郎や北村透谷を取り上げている。

近代の世相から歴史を描こうとした試みに関しては柳田國男が想起される。柳田國男は、『明治大正史 世相編』において、「毎日眼前に出ては消える事実のみに拠って、立派に歴史は書ける²⁷」とする視点から近代の世相が描かれており、その中では青年団や婦人会についても触れている。ただし、視点は庶民の実践からそれぞれの時代を描き出すことにあり、やはり社会教育の視点とは異なっている。

社会教育の文脈からみた民衆文化の研究には、北田耕也による研究がある²⁸。北田は大衆文化を、「資本によって大衆向けに大量生産された文化的消費財と、それを中心とする生活の生み出す行動様式と価値表現の総体²⁹」とし、こうした大衆文化の支配を超えた民衆文化の重要性を説いている。そして民間文芸や流行歌、共同学習等、種々の社会教育実践を取り上げながら、文化の創造を果たす民衆の存在に着目している。

民衆文化に関する近年の研究成果は『地域に根ざす民衆文化の創造「常民大学」の総合的研究』である³⁰。本書は全国各地に広がる後藤総一郎による「遠山常民大学」、多摩地域での立川柳田國男を読む会を取り上げており、そういった実践を生んだ素地として、三多摩の民衆による学習・文化活動があったことを、「ふだん記」も含めつつ示している³¹。同研究から、三多摩は民衆の学習・文化が発展し、常民大学の文化を受け入れる土壌を持つ地域であることが示唆されているといえよう。

⑤三多摩地域史研究

三多摩の学習・文化活動を対象にした研究には、地域史、郷土史の観点から多様な先行研究があり、三多摩の各自治体で取り組まれたてきた自治体史の一環での研究を挙げることができる。また三多摩全土というよりは各自治体単位にフォーカスした史的研究が中心

となってきた。

その一方、三多摩全域にわたって、近代から現代にいたる多様な学習・文化活動を、歴史を文学、教育、産業、地理、自然など多様なテーマから論じた研究に、雑誌〈多摩のあゆみ〉がある。これは三多摩地域の地域文化発展に寄与をしてきた多摩中央信用金庫の財団である「たましん地域文化財団」から発行されている三多摩をテーマにした季刊誌であり、社会教育をテーマにした号もみうけられる³²。多摩百年史研究会編著『多摩百年のあゆみ』のように、三多摩の通史を描いた書もみられる³³。三多摩が近代に成立してから 100 年に及ぶ政治、産業、などを論じており、自治体史の変遷や年表などを含めて三多摩の容貌を描いている。神奈川県に属していた三多摩が 1893 年に東京府に移管されて 100 年にあたる 1993 年には、多摩 100 年の歩みをまとめた著書も出されており、鈴木理生³⁴、あるいは松岡喬一による研究³⁵などがある。

このように三多摩地域で展開されてきた学習・文化活動に関して、一定の蓄積があったことは認められる。本論文では、新たに第一次資料を発掘しつつ、近現代の三多摩の学習・文化活動を「自分史」及びその源流に焦点化して検証しながら、三多摩における地域社会教育史研究に新たな示唆を与えたいと考えている。

本研究の第一の意義は、戦後の社会教育実践の一つとして注目されてきた「自分史」の源流を解き明かすことにある。現在ブームとも言われる「自分史」であるが、その源流の一つは「ふだん記」にあるとされながらも、これまで検証が必ずしも十分ではなかった。もし、源流の一つが「ふだん記」にあるとするならば、「ふだん記」はなぜ、そしてどのように生まれてきたのであろうか。本論文では、「自分史」の源流とされる「ふだん記」が、どういった歴史的経緯、社会環境、人的ファクターの中でいかに成立してきたかに迫ることで、社会教育史研究の新たな側面を開くことを企図している。

第二の意義は、人はなぜ自分自身について書くのかを、地域社会教育史の視点から考察することである。文章を執筆する実践としては、戦前から戦後にかけて、生活綴方、生活記録、さらに本論文で取り扱う「ふだん記」や「自分史」があり、数多くの文章が草の根の人々により積み上げられてきた。本論文は、そうした執筆者たちが書こうとする意欲をもたらす力の源泉を、三多摩という地域における社会教育の歩みといった視点からみていくことを試みるものである。「ふだん記」の橋本の学習論、運動論、青年論も、分析する意義があると思われる。

現代において文章を書くこと、それを発表することは、パーソナルコンピューター、携帯電話などのハードウェアの普及、インターネット普及に伴うソーシャルネットワークキングサービス（SNS）などのいわゆるメディアの発展に伴い、多様な形で行うことが可能になった。そのため、自らのことや生活に関わることを手軽に書く人々が増えている。文章を書き、読み合うことを通じて人々はお互いにコミュニケーションをとっている。

文章を発表する場（メディア）は違うが、SNS とこれまで積み上げられてきた書く実践では、自身のことを執筆し読み合うという形式（フレーム）に変わりはない。明治維新以降の三多摩における自己表現活動に関する執筆者の意欲を追うことは、現代的意義もまた帯びている。

第三の意義は、これまで表出されていない、草の根の学習・文化活動に携わってきた人々の存在に光を当てることである。社会教育のすそ野は広い。本論文では、公的社会教育以外の社会教育実践に焦点を当てることで、草の根の人々に対する地域社会教育の役割を再考していきたい。とりわけ本論文においては、学習・文化活動の担い手として青年に注目している。その中には、自由民権運動、大正期の青年文芸誌の活動、奚疑塾、戦後直後の青年学習運動などがある。

顧みれば近世日本には、子どもと大人、成熟者と未成熟者の区分けしかなかった。すなわち、成熟者へと成長する過程にある青年は、近代以降に生まれた存在であるが、いわば未熟でマージナルな存在として位置づけられていた。こうした青年たちが地域の活性化の中核として活躍していた学習・文化活動を明らかにすることは、それ自体が近代以降の人間の成長を問い、現代の社会教育における青年の存在を考える上でも示唆を与えるものである³⁶。

活動の過程における熱意や喜び、苦悩などは必ずしも過去の青年だけのものではない。むしろ未成熟な存在であるがゆえの青年たちの自由の獲得への奮闘や苦悩などをみることは、現代青年の社会教育実践を考えるためにも意義があると思われる。

4 各部の構成と概要

本研究では、上記の問題意識と仮説にしたがって、4部17章及び二つの補論の構成で考察を行った。

序論

本論

第1部 明治期の三多摩における社会教育実践

第1章 近代三多摩の概要

第1節 三多摩の区域

第2節 近代三多摩の就学率

第2章 自由民権運動期の三多摩における五日市の青年による学習・文化活動

第1節 明治期三多摩における自由民権運動の位置付け

第2節 五日市の自由民権運動

第3節 勸能学校と学芸講談会

第3章 自由民権運動期における地域と青年に関する研究

第1節 千葉卓三郎の遍歴

第2節 故郷喪失者を受け入れた要因

第3節 千葉卓三郎の五日市における役割

第4節 千葉卓三郎の精神と地域の青年の受け入れ

第5節 「外来青年」と社会教育実践における意義

第4章 明治末期における『週刊多摩新聞』の研究

第1節 明治末期の三多摩における地方新聞

第2節 週刊多摩新聞の地域と概要

第3節 週刊多摩新聞と投書

第2部 大正デモクラシー期の三多摩における社会教育実践

第1章 大正期稲城における青年の地域文芸誌の研究

第1節 三多摩における大正デモクラシー期の学習・文化活動に関する先行研究

第2節 大正デモクラシー期のメディアと青年

第3節 稲城における文芸誌活動

第2章 地域通俗教育としての稲城・奚疑塾に関する考察

第1節 奚疑塾の成立の背景

第2節 奚疑塾の教育

第3節 奚疑塾の果たした役割

第3章 近代の私塾における同窓生の研究—奚疑塾を対象として—

第1節 近代における私塾に関する先行研究の到達点と課題

- 第2節 奚疑塾同窓生の研究
- 第4章 奚疑塾における錦絵の研究—視聴覚教育の観点から—
 - 第1節 明治期における錦絵と教育
 - 第2節 奚疑塾と教育内容と教育方法
 - 第3節 奚疑塾における錦絵の主題
 - 第4節 奚疑塾における錦絵の内容
- 第3部 戦後直後期の三多摩における青年の社会教育実践—戦中からの復興と戦後社会教育の出発—
 - 第1章 第二次世界大戦下における三多摩の社会教育
 - 第1節 第二次世界大戦下における社会教育の全国的状況
 - 第2節 第二次世界大戦下の三多摩の社会教育
 - 第2章 戦後直後期稲城における青年の社会教育実践の実証的研究
 - 第1節 1940年代後半における三多摩における学習・文化活動の背景
 - 第2節 稲城村青年団の活動
 - 第3節 美を語る会の概要と活動内容
 - 第4節 美を語る会の青年
 - 第5節 サークル活動における青年
 - 第6節 青年教員による人形劇、演劇
 - 第3章 「ゴードン・W・プランゲ文庫」にみる戦後直後期の三多摩における青年の学習・文化活動
 - 第1節 プランゲ文庫の概要
 - 第2節 プランゲ文庫の小冊子を通してみた三多摩における青年の学習・文化活動
- 第4部 戦後三多摩社会教育史における橋本義夫及び「ふだん記」に関する研究—「ふだん記」から「自分史」へ—
 - 第1章 橋本義夫の社会教育実践の一側面に関する研究
 - 第1節 橋本に関する先行研究の到達点と課題
 - 第2節 橋本関連資料について
 - 第3節 社会教育実践の視点からみた橋本義夫の実践
 - 第2章 橋本義夫の学習論研究—「ふだん記」を対象に—
 - 第1節 「ふだん記」の成立と平凡人の教育

- 第2節 橋本義夫の学習論における鍵概念
- 第3節 橋本の学習論の検討
- 第4節 「ふだん記」の背景にみえる易行道の書
- 第5節 「ふだん記」の文友による易行道の受容
- 第3章 「ふだん記」における青年の学びに関する一研究
 - 第1節 橋本義夫の中にみえる青年の学び
 - 第2節 橋本の考える「ふだん記」の青年の学びにおける意義
 - 第3節 青年の書く「ふだん記」にみる学び
 - 附 橋本義夫「青年版『ふだん記』のすすめ」一覧表
- 第4章 ナラティブの視点からみた書く実践に関する一研究
 - 第1節 ナラティブをめぐる諸相
 - 第2節 書く実践の執筆過程に関する事例分析
- 第5章 書く実践の意義に関する一研究—「ふだん記」を対象として—
 - 第1節 先行研究及び本章の視角
 - 第2節 「ふだん記」インタビュー調査の概要
 - 第3節 書く実践の意義に関する「ふだん記」のケーススタディ
- 第6章 「ふだん記」と「自分史」の一考察—橋本義夫による実践の再評価—
 - 第1節 先行研究と本章の位置づけ
 - 第2節 「自分史」の定義・起源と「ふだん記」
 - 第3節 「自分史」執筆の要点と「ふだん記」
 - 第4節 「ふだん記」の執筆内容の検討
- 補論1 1980年代創始の各地グループに関する研究—「ふだん記」北九州グループ、
あいちグループを対象として—
 - 第1節 「ふだん記」各地グループの概要
 - 第2節 北九州グループ
 - 第3節 あいちグループ
 - 第4節 各地グループの意義
- 補論2 地域における学習・文化活動の受容過程に関する研究—北海道における初期
「ふだん記」を対象にして—
 - 第1節 先行研究

第2節 初期北海道「ふだん記」関連史料及び本研究に係る調査

第3節 初期北海道「ふだん記」の歩み

結論

参考文献

資料 橋本義夫略年譜と三多摩の学習・文化活動

要旨は以下の通りである。

①第1部

第1部は近代三多摩の出発点の時期であり、三多摩の近現代史において最初に学習・文化活動の熱が高まった時期である自由民権期に着目し、そこで展開されたさまざまな学習・文化活動を対象に検討した。第1章では、近代三多摩を俯瞰した。北多摩、南多摩、西多摩と三つの地域から構成されている近代の三多摩は、いわゆる都市近郊地域であったが、農村地域の特徴をもまた色濃く持ち、都心部とは異なる地域性があることがうかがえた。近代における三多摩の就学率をみると、都心と隣接しているものの、就学率は全国平均と比べても高い水準とはいえ、必ずしも学校教育は先進的に整備が進められてはいなかったことも推察できた。

続いて、第2章では自由民権運動下の学習・文化活動を対象にした。自由民権運動は主に1874年の民撰議院設立建白書の提出から1881年の明治十四年の政変にピークを迎えた政治運動として知られる。これに伴って政治以外にもさまざまな分野で多くの学習・文化活動が展開されている。民権運動が高まっていた三多摩では多数の結社の活動に示されるように多くの実践がみられた。第2章では三多摩の自由民権運動の中でも、五日市憲法という本格的な私擬憲法を生んだ西多摩・五日市地域の学習・文化活動を対象に取り上げ、社会教育史に位置づける試みを行った。第1節では三多摩における自由民権運動の概要を確認したが、三多摩は全域に存在する豊富な学習結社の存在があり、自由民権運動の下での学習・文化活動の展開を伺うことができた。第2節では西多摩の五日市を対象にし、文化を育んだと思われる地域風土に着目しながら学習・文化活動の姿に追った。五日市は、地域外から来た人々が集う地域であったこともあり、五日市憲法起草の中心人物の一人、千葉卓三郎も五日市に流れ着いた。そのことから、五日市の地域性は多様な学習・文化活動展開の遠因となりえたと推察できた。第3節では五日市の勸能学校や、社会問題をテーマに豊富な討議が展開されていた学芸講談会を取り上げた。これらの活動は参加してい

た青年の成長に影響を及ぼしうるものであり、社会教育実践としての意義を持つことが明らかになった。

第3章においては、学習・文化活動に内在する人々の学習意欲に迫るため、学ぶ場が生み出される原動力を、地域外の人物を中心に論じた。対象としたのは仙台から三多摩に流れ着いた青年である千葉卓三郎である。五日市憲法起草のキーパーソンであった千葉の人生遍歴を追いながら三多摩の学習・文化活動との出会いとそこでの成長を論じた。第1節で焦点を当てたのは千葉卓三郎の遍歴である。千葉は戊辰戦争の敗北を契機に放浪をすることとなったが、物理的に地域を移っただけではなく、精神的面でも放浪者のようにさまざまな思想に触れながら学び続けた。千葉の自由民権運動に出会うまでの過程を示した。第2節では、仙台からの流入者であった千葉卓三郎が五日市に受け入れられた理由の考察を深めたが、そこには地域の開放性が影響していた。第3節では千葉が地域に果たした役割を取り上げた。学芸講談会に関わり五日市憲法を起草した千葉が、会の意見集約などのまとめ役となっていた。第4節では千葉の思想に着目し、千葉の言説と五日市で展開されていた議論とが重なりあうことを確認できた。第5節は、五日市と千葉の結びつき、例えば民権運動を通じた千葉と五日市の邂逅など、さまざまな人々の結びつきから結果としての私擬憲法・五日市憲法が生み出されたことをみた。以上から、千葉卓三郎は五日市にとって触媒の役割を果たす存在であったことが確認された。五日市のケースにおいては、千葉という個人の成長とともに、五日市の人々による受け入れや、私擬憲法を生み出すに至った熱意において、学習を通じた社会への理解の深まりや憲法への理解など、学びの要素をみることができた。

第4章では、人々の学びに寄与してきたと思われるメディア、中でも地域との結びつきの観点から地方新聞を取り上げた。対象は明治末期の調布地域の地方新聞である週刊多摩新聞であり特に着目したのは、読者からの発信や交流の場になっていた投稿欄である。投書は出版手段を持たない人々にとり、自らの意見を文章にして発表する上で重要な役割を果たしていた。

第1節では、明治期の三多摩における地方新聞の概況や全国的な動向も確認した。第2節では、週刊多摩新聞の及んだ地域の範囲や新聞の性格を、大新聞との比較を通して分析した。第3節では読者投稿欄に着目した。地域密着型のメディアの地方新聞は地域の情報を提供する役割だけでなく、大新聞では投書欄が縮小される流れの中、週刊多摩新聞においては活発になっていた点に特徴がみられた。同時に、書きたい意欲を持つ草の根の人々

が存在していることもまた認められる。このような過程をみると、地方新聞は文章を投稿する人々の学びに向かう意欲を支えることができる役割を帯びていたことも確認した。

第1部を通観してみられるのは、近代の出発点にあたる時期に、多くの学習・文化活動が展開され、社会教育実践が生まれ育つ素地が芽生えていたことである。三多摩は自由民権運動が活発であった全国有数の地であり、数多くの学習結社も組織されていた。中でも、五日市では地元の人々の学びへの熱意と共に、外から人物を受け入れ、意見を交わしながら学びあう姿がみられていた。

さらに、第1部で取り上げた週刊多摩新聞の事例は、この時期の学びの実践が民権運動に関わる一部の人々によってのみ行われていたわけではないことを示すものであった。投書欄に書かれた多くの投書は、それ自体小さいつづやきであり、組織的に活動し大きなうねりとなるものではなかった。しかし、何らかの意見表明を発信したい人々が草の根に多数存在していることを表していた。

②第2部

第2部では大正デモクラシー期の地域文芸誌の研究、さらに明治末期から大正初期にかけて開設された私塾・癸疑塾に関する研究を行った。大正デモクラシーは、1910年代頃から始まった主に大正期を中心とする民主主義運動であり、政治に関する普通選挙運動はもとより、自由主義を重んじる風潮によりさまざまな学習・文化活動が展開された。この時期は三多摩において、自由民権運動に続く学習・文化活動の隆盛期と位置付けることができる。なお、癸疑塾は明治期から大正初期にかけて設置された私塾であり、大正デモクラシー期と必ずしも重ならない。しかし明治の民権期の薫陶を受けた活動であり、大正期以降の稲城に多くの人材を排出したことも考え合わせると、自由民権から大正デモクラシーへの橋渡しをした同塾の意味は大きい。

第1章では大正デモクラシー期の青年たちによる書く実践を対象に検討を進めた。焦点を当てたのは南多摩・稲城における地域文芸誌である〈せゝらぎ〉、〈谷戸川〉、〈大丸同窓会誌〉である。文章に記されている人々の考え方などをとりあげつつ、地域での学びの姿に迫ることを試みた。第1節では大正デモクラシー期の学習・文化活動に関連する先行研究を取り上げた。第2節はこの時期の三多摩における文芸誌の概要の整理である。ここでは大正デモクラシーの自由闊達な意見を述べる機運が高まっていることを背景に、三多摩各地で数多くの文芸誌が発行されていることを論じた。第3節においては、稲城の青年による地域文芸誌の文章に視点を当て、青年たちによる学習・文化活動への思いや活動

のありかたへの提言など、書き手である青年自身の言説から学びの姿を追った。地域文芸誌に収められている作品は、創作の作品であるが現実における社会的問題をテーマして創作しているものも少なからずみられ、創作の形を取りながら、社会に意見を発信していきたいとする書き手の情熱を見出すことができるものであった。加えて作品の創作に関しては会員相互で紙面を通じての意見交換などで青年たちが学びあう姿も確認できた。

第2章では、明治から大正にかけて稲城に開設されていた私塾・奚疑塾を対象に地域通俗教育の視点から、近代における私塾を論じた。第1節では奚疑塾が開設された背景として、奚疑塾開設時期の私塾に関する動向や、稲城の地域状況を確認した。近代以後も私塾が依然残されており、近代に入ってから設立された奚疑塾には自由民権運動の影響がみえること、地域ぐるみで塾を支える環境になっていたことが確認できた。

第2節では、奚疑塾の教育の目的や理念を示した。奚疑塾の目的の一つに経済的な理由で教育が受けられない人も中等教育の機会を提供することが掲げられていたことや、塾の創始者自身が私塾を学習者の自己研鑽の場と考えていたことが伺えた。第3節では奚疑塾が地域に果たした役割を考察した。奚疑塾は三多摩を中心にしつつも寄宿制度により広く塾生を集め、多数の同窓生を輩出していたこと、女子教育の役割も担っていたことが確認でき、地域の教育機会拡大に寄与していたことが明らかにされた。さらに、学習方法ではそれぞれが自主性を持ち学習に取り組む自己教育の方法を取り入れられていたこと、塾に関わった人たちの書簡からは塾生たちの支えあいの姿もみられた。これらを鑑みると、奚疑塾は地域における学校以上の存在であり、学校教育と通俗教育の役割を併せ持つ塾であった。

第3章では、学習者の側面から私塾の奚疑塾の同窓生に焦点をあてた。同窓生の動向をみることで、私塾の学びが青年にもたらした影響を考察することが目的であった。第1節では、既存の近代私塾に関する研究の文献調査を行い、第2節では奚疑塾が多くの同窓生を生んだ背景と奚疑塾の同窓生の足跡を取り上げた。さらに、同窓生の学びや足取りをみることから浮かび上がってきた奚疑塾の役割は次のとおりである。1)中等教育以降の学びを続けたい人にとっての予備校、2)地域の政治経済のリーダーや教育者といった人材輩出、3)塾で学びたい人の自己研鑽の場。これらをみると奚疑塾は、地域に基盤を置く多様な機能を持つ教育機関であったと捉えることができよう。

第4章では、奚疑塾の教育方法の一端をみるため、奚疑塾に所蔵されていた錦絵を対象に取り上げ錦絵の持つ視聴覚教育メディアとしての意義を検討した。第1節では明治期の

錦絵の概要を把握し、先行研究の到達点と限界を取り上げた。錦絵は明治期には衰退期とされるが、技術的には円熟していたことや、庶民に人気の高いメディアであり興味を集める力があつたことを確認した。中でも庶民の楽しみであるとともに、情報伝達の機能を持っていた。第2節では奚疑塾の教育方法と教育内容を取り上げた。奚疑塾の教育は教養を重視した基礎教育が中心であった。教育内容をみると、歴史に関する学習や、問答などの方法で学んでいることが浮かび上がった。第3節では、奚疑塾の錦絵を取り上げた。錦絵の題材を整理すると、歴史やニュースに関する錦絵が多く収集されており、教育的な意図を持って集められていたものであった。第4節では奚疑塾所蔵の錦絵の内容に着目した。歴史が題材となった錦絵でも通史的な把握が可能なものと、時代別のものの双方があり、視覚的に歴史を学ぶことができる錦絵が多かったことや、塾での教科書の主題が錦絵にされているものも所蔵されていた。さらに、同時代の事件や世相などを描いた錦絵は、日常生活ではみることが難しい事柄を主題にしたものが収集されていた。これらの錦絵はいずれも視覚的な側面から学習を支えることが可能であったことを示すものといえよう。

以上により、奚疑塾の錦絵は一般的に流通していた錦絵の主題傾向とは異なり、教育的な意図を持って収集されたこと、かつ歴史に関する事柄や文明開化などの内容を視覚的に知る、視聴覚教材の役割を果たしたことが明らかにされた。奚疑塾に集められた錦絵の資料群は、視聴覚教育の先駆的存在であり、視覚によって新たな知識獲得の可能性を広げ得ることを提示している。

第2部では、地域青年文芸誌と私塾から自由民権運動後の三多摩における学びの実践活動を考察した。前者の地域青年文芸誌は、青年の学びに向かう意欲が形となった文章を収載し、これを読みあう実践であった。創作作品だけではなく、創作の形を取りながら書き手の意見表明をしている作品が収載されている点を特徴として挙げられる。ここでみられたのは、書き手それぞれに内在する思いを文章化すること、掲載された文章を読みあうことなど、青年たちの創作活動を通じた地域での学びの姿である。地域青年文芸誌からは、地域の中で書き続ける実践が、この時代においても息づいてきたことがわかる。

後者の奚疑塾の実践からは、地域での青年の学習の場として私塾を位置づけることができた。近代以降の私塾は学校の役割を帯びていた側面も持つが、本研究で取り上げた奚疑塾の事例では、学校だけの役割を果たすに留まるものではなく、小学学齢後の青年に所得や性別などには関係なく多様な形で学びを提供していた。中でも、錦絵の活用など独特の教育方法を取っていたことは特筆に値する。

この二つの事例は文芸誌と私塾と形態は異なっているものの、前者は人々が作品を書き発信できる場、後者は小学学齢後も継続した学びができる場であり、学び手の学習熱を受け止めていた場が、地域で一定の役割を果たしていたことを示唆するものである。

③第3部

第3部においては戦中から戦後初期における三多摩の社会教育実践の展開を論じた。中でも、戦後直後期の青年の学習・文化活動に焦点をあてながら、文化への熱が高まる状況下の青年の学びに向かう意欲に迫ることを試みた。

第1章では戦中における三多摩の社会教育を取りまく状況を取り上げた。社会教育団体の組織化など、社会教育でも戦争の影響が垣間みられ、三多摩の社会教育でもこの影響から免れ得なかったことが、稲城や府中の青年教育の事例からうかがい知ることができた。第1節では戦中の社会教育の概要を論じた。主に戦時態勢に即応した社会教化活動の強化や社会教育の体系的整備が進められていた。第2節においては、三多摩における戦中の社会教育に着目した。三多摩においても個別の事例は別にしても、むしろ青少年団の組織化など、戦中の社会教育のうねりの中にあることを確認した。さらに東京に近い立地の影響もあり多くの軍需工場が置かれている状況もみることができた。工場に設置された青年学校が学習機会を拡大したプラスの側面もあったが、一方で戦争の色彩の濃い点も内包している。

第2章からは戦後直後期に軸足を置き、戦後の出発の時期に三多摩の社会教育実践がどのように展開されていたかを論じた。第2章では戦後の稲城地域を対象に、1940年代後半における青年による学習・文化活動の事例に関して証言を交えて活動内容を論じた。第1節では、南多摩・稲城を対象にし、地域状況を取り上げた。そこでは、稲城地域においても戦中の状況からは変化を迎え、学習・文化活動への期待の高まりとともに、地域が重要な社会教育実践の場となりつつあったことを確認した。第2節では稲城村青年団を取り上げ、戦後の新しい時代を迎えた中、文化国家建設の目標を掲げつつ活動に臨む青年の意欲をみることができた。第3節では地域密着型の美術鑑賞サークル「美を語る会」を検証した。この会は地域の人々の沙龙的な活動であり、青年団とは異なる静かな文化への期待を持つ会であった。第4節は「美を語る会」に関わりのある青年たちに焦点を当てた。有力者のサロンという会の性質がある一方で、少なくない青年層の参加があり、サークル活動への関わりがその後の人生に影響を持っていたことを指摘した。第5章では小規模サークルの事例を取り上げた。サークルでの学びが参加者にとり一過性の活動の意味にとどま

らない価値ある学びであったことも伺えるものであった。第6節では、青年教員による演劇及び人形劇の事例を、活動をしていた人々の楽しみの活動であったと同時に、鑑賞する地域の人々にとっても娯楽として意義あるものであったことを確認した。

第3章では、戦後直後期の文献コレクションであるプランゲ文庫に収載された資料群を対象に青年の社会教育実践に関する研究を、小規模の出版物を対象に行った。そこではプランゲ文庫収載の出版物に記された青年たちの言葉から戦後直後期において、書く実践に携わってきた人々の姿をとらえるよう努めてきた。

第1節ではプランゲ文庫の概要把握につとめた。特にその概要と収録誌の分野を取り上げた。プランゲ文庫にはこれまでの資料群を越える相当数の資料が収載されており、そのため青年の学習・文化活動に関連する資料が一定以上収められていることを確認した。

第2節ではプランゲ文庫に収められた資料を取り上げながら、当時の活動に関わる人々の思いなどを読み取った。対象は青年団、学校、労働組合、地域でのサークル活動であった。出版物から、学習・文化活動の概要及びそこにおける考え方をみたが、いずれにせよ敗戦を経験した直後であり、これからの国を文化によって創り出していこうという強い思いは総じて共通していた。青年が関わる出版物のうちいくつかを形態別に取り上げた。それは、戦中と異なり文化に期待を持ちながら活動が行われていた青年団の団報、新しい学校での教育に対する考え方や科学を意識した生徒活動への取り組み、労働組合での作品の巧拙を意識しない創作活動などである。いずれも戦後直後期の文化への渴望が高まっていた時代背景の中、希望を抱きつつ文章を書き記していることを確認した。

第3部では、戦中から戦後直後期にかけての学習・文化活動を、三多摩における書く実践の取り組みを取り上げながら論じた。戦後直後期の学習・文化活動の隆盛は、新しい時代の到来とともに文化への期待の高まりがあり、三多摩でも多様な社会教育実践が展開される下地が作られていたことを示唆するものであった。

④第4部

第4部は、戦前、戦中、戦後の三多摩を生きた八王子の実践家である橋本義夫及び「ふだん記」を対象とした研究である。「ふだん記」をめぐる理論と実践を解き明かしながら、「自分史」の起源を再検証することを目的とした。

第1章では、橋本義夫に関する先行研究を概括し、橋本の社会教育実践家の側面を論じた。第1節においては、橋本研究の端緒を開いた色川大吉ほかの、「ふだん記」や「ふだん記」以外の橋本の実践に焦点を当てた研究を整理し、先行研究の到達点と課題を論じた。

そこで見出されたのは橋本や「ふだん記」は、社会学や文化人類学、歴史学などで取り上げられ、研究対象としての意義があることが示されてきた一方で、社会教育実践の視点からはこれまで論じられることがほとんどなく、未達の分野であることもまた浮かび上がった。第2節では橋本義夫、「ふだん記」に関わる主な資料に関して論じた。第3節では橋本の人生遍歴をみつつ、橋本の取り組んだ実践を社会教育として読み解いた。学校での経験には失望を感じていた橋本であったが、学校を出たのち青年の学習運動への参加、書店・揺籃社の設立とそこに集う人々との交流、さらにこのつながりから生まれた教育科学研究会の実践など精力的に学習・文化活動に取り組んでいた。戦後に入ってから橋本は地方文化運動、建碑運動、さらに三多摩の地方文化に関する執筆活動などを行ってきたが、地域の記録を文章などさまざまな形で残すようつとめた実践であり、これらはいずれも「ふだん記」の創始につながっていることを確認した。

第2章では「ふだん記」をめぐる橋本の言説を研究対象に、学習論としてまとめた。第1節では「ふだん記」の出発時の概要と、人々に受け入れられながら活動を拡大していく姿に迫った。第2節では、橋本の文章執筆に関する言説をまとめ、鍵概念の抽出をした。第3節ではその鍵概念を学習論としてまとめた。橋本の学習論は実践の中で確立してきたものであり、「私でも書ける、書けない者なし」、「下手に書きなさい」、「文章は手紙にはじまる」、「だれでも本が作れる」などの「書く思想」により成り立っていることがわかった。

橋本の学習論は万人教育主義、易行道主義、平等主義、地域主義として見出すことができた。これらから伺えるのは「ふだん記」の執筆における橋本の学びや活動の普及に関する考え方、さらに多くの人々が文章を書く実践に参加できるように支援しようとする考え方である。第4節は「ふだん記」に関わる橋本の学習論の中でも、特に重要であると思われる易行道に焦点を当て、橋本が「ふだん記」の普及にあたり参照したとする書を取り上げながら「ふだん記」の背景にある易行道の考えを探った。第5節では、こうした「ふだん記」の理念がどのように文友たちに受容されたかを文友の語りから明らかにした。

第3章では、橋本自身や、参加した30代の人々が書き記した「ふだん記」の文章を分析することにより、「ふだん記」にみられる青年論を実証的に解き明かそうと試みた。「ふだん記」には、青年の学びへの思いがあらわれているものであった。第1節では、橋本の青年期の学びを追った。橋本の青年に対する思いの出発は、自身が学校時代において経験してきた挫折とそれがもたらす劣等感が根底にあったことを見出すことができた。第2節では、橋本の雑誌連載記事、「青年版『ふだん記』のすすめ」の分析を通じて橋本の青年論に

迫った。橋本は「ふだん記」の書き方を示しながら、実験の重視や、恐れず活動をすることの重要性を説いていた。さらに橋本の教育論は、被教育者の得意な事柄をまずみつけて、その部分を指導して伸ばすこと等も含んでいた。橋本は青年を含めた「万人の可能性」を徹底的に信じており、発見し、伸ばすことを意識していた。さらに青年が可能性を伸ばすための具体的方策の一つに「ふだん記」を執筆することを考えていた。

第3節は「ふだん記」に参加した若年層の文章の分析により、橋本の青年論に関する具体的な活動の姿を追うものである。さまざまな遍歴を経験してきた人々の「ふだん記」には、「ふだん記」により若者の可能性が伸ばされていたこと、文章執筆の実践によって新たに移り住んだ地域に関する愛着の念が生まれたことが示されている。また詩が好きでありながらこれまで経験できなかった人が詩を書くことで創作の力に気付いたこと、生まれながら一つの地域に暮らしていた青年が改めて自らの地域の良さに気付くこと等、それぞれの執筆から成長の姿を見出すことができた。

第4章では、「ふだん記」をナラティブ（語り）の視点から考察した。「ふだん記」の書き手と、橋本による相互のやり取りにより「ふだん記」の物語が完成する過程は、まさに「ふだん記」がナラティブとしての意義を持つことを示している。第1節ではナラティブをめぐる諸相を先行研究から示し、第2節では、ある「ふだん記」本が完成するまでの過程を、書き手と橋本の手紙などのやり取りから分析した。

第5章では、書く実践がどのような意味を書き手にもたらすのか、書き手へのインタビューと書かれた文章から実証的に検証した。第1節においては、書き手の長い人生の中で書く実践がどのような影響を及ぼすのかという分析の視角を示し、第2節では調査概要をまとめた。第3節では、ライフストーリーとの関わりから、4人の「ふだん記」文友を取り上げ、自らの生きてきた来歴の文章化は、それぞれの生き方にポジティブな影響をもたらしていることを明らかにした。

第6章は「ふだん記」の作品と、「自分史」として書かれ、あるいは論じられている作品の比較研究である。「自分史」の源流を探る本研究のまとめとして、「ふだん記」と「自分史」の内容を比較し、「ふだん記」が「自分史」であることを再検証した。

第1節では、「ふだん記」及び「自分史」のさまざまな定義を確認し、「自分史」は社会の大多数を占めている市井の人間それぞれが自らの手で書き記した歴史のことであることを論じた。第2節は「自分史」の語の起こりを整理した。「自分史」は色川大吉の造語であるといわれるが、その語が生まれた念頭には「ふだん記」の存在があった。第3節では、「ふ

だん記」、「自分史」とともに単に事実のみを羅列するものではなく、執筆者の考え方を入れながら書き進めるべきであるとされていることが共通点であることを論じた。

第4節では「ふだん記」運動への参加者の手による「ふだん記」本を具体的な対象にして分析した。「ふだん記」には「自分史」そのものが描かれており、「ふだん記」は「自分史」の直接の原型であることがわかった。「ふだん記」は、すでに社会教育実践として評価されてきた「自分史」と同様に社会教育実践の範疇に組み込んで考察すべきであることを本章では明らかにした。

第4部では、橋本の思想や実践、戦後1960年代後半から創始された書く実践「ふだん記」を実証的に解き明かすことを目的としてきた。浮かび上がったのは、三多摩における地域文化に育まれた橋本が創始した、「ふだん記」に賛同した多くの草の根の人々が書くことへの意欲を持ちながら文章を書き続け、「自分史」の創出につながっていったことである。

なお、第4部の末尾には、「ふだん記」の実践を全国で行っている各地グループを対象にした論考を補論として置いた。各地グループは三多摩から地理的に離れているものの橋本や「ふだん記」の理念に共鳴しながら活動を行っていることが伺え、三多摩発祥の書く実践の文化が、全国で独自の発展を遂げていることを示す重要な証左となるといえる。

さらに補論1での研究対象は、1980年代に創始された二つの各地グループ、「ふだん記」北九州グループとあいちグループである。第1節では各地グループの概要、第2節では北九州グループ、第3節ではあいちグループを、それぞれ論じた。第4節では各地グループの意義に関して述べている。

補論2においては、北海道における各地グループの初期の活動を対象にした。北海道の各地グループは全国各地に広がっているグループ活動をみるうえで特に重要な存在である。なぜならば、道内だけで六つ（旭川、札幌、江別、北見、帯広、留萌）と最多の数を誇っており、なおかつ道内の各地グループの集まりである全道交流会など、活発な実践を行っているためである。ここでは、「ふだん記」が北海道に芽吹き、根付くまでの初期の北海道「ふだん記」を追い、学習・文化活動の広がりを考察している。これらの補論は、三多摩の水脈の上に培われてきた「自分史」の表現活動が、全国に普及していることを示し、さらに書く実践の今後の展開に示唆を与えるという意義がある。

5 結論と課題

最後にまとめとして、本論文の結論について述べ、今後の課題を述べておきたい。

第一は、近現代三多摩の約 150 年にわたる地域社会教育の歩みを俯瞰すると、様々な学習活動が出現し、学習活動の中でリーダーが育ち、そのことでさらに新たな学習活動が展開するといった学びの循環が見いだされることである。明治期以降、橋本が戦後に創始した「ふだん記」に至るまで、三多摩では明治期の学習結社での討論、大正期の小学学齢外者を対象にした私塾、戦後直後期のサークル活動などが展開され、地域は時代の変遷にも変わらず学びの場となってきた。たとえば奚疑塾の創始者である窪全亮は、三多摩の自由民権の薫陶を受けつつ育ち、活動を展開し、さらに自身も多くの人材を生み出している。

また八王子で生涯を送った橋本は、三多摩地域の薫陶を受けながら育ち、自身も多様な学習・文化活動を興してきた。中でも、三多摩の地域文化に着目しながらそれらの掘り起こしにつとめ、顕彰碑の建立や三多摩の歴史を研究し書き残す実践に取り組むなど、三多摩の地域文化に関心を寄せていたことは、注目すべき点であった。橋本がこうした執筆活動から、「私でも書けるのだから、誰でも書けるだろう」と庶民の文章運動の創始を着想したことも、重要なことと指摘できよう。換言すれば、橋本を育てたのは三多摩の地域社会教育実践の蓄積という土壌にあったのである。

こうした三多摩における学習活動の積み重ねが実践家、思想家、教育家といった学びのリーダーを生み出し、そこからさらに多様な活動が生まれるという学びの好循環が三多摩には生まれてきたといえよう。

第二に、三多摩における近現代の地域社会教育史をみると、いわば基盤として「書く思想」が醸成されていたことである。本論文においては多様な学習・文化活動を事例に取り上げてきたが、中でも、自らの思いを文章にして伝える活動は、文章の種類や発表する媒体に関わらず、各時期でみることができた。

例えば、地方新聞の投書欄、地域文芸誌、戦後直後期の各種のミニコミ、60年代の「ふだん記」などの事例はそれを裏付けるものである。新聞投書欄では意見の投書が、地域文芸誌では文芸作品が、戦後直後期のプランゲ文庫に収められているミニコミでは文化活動の記録などが、さらに「ふだん記」では自分の来歴や身の回りの生活が、それぞれ書かれていた。いずれも文章の形態は違っていたが、自らのことを客観的に見つめ直し、社会の中で位置づけ、文章にすることは共通して根底にみることができた。

書く実践は、人間の内面に潜在化し沈潜していた学びに向かう意欲を文章という形にして顕在化し、時代を超えた思いを紡いできたともいえる。書く実践が各時期に存在し続けてきたことは、同時に、近現代の三多摩地域において、人々の直接の声を表出する場が、

ありつづけてきたものと考えることができよう。三多摩では書くことで、人々がつながり、いわば「書くコミュニティ」が形成され、三多摩の文化的な土壌の中で脈々と受け継がれてきたことに他ならない。

明治期、大正期、戦後直後期の書く実践は、「ふだん記」、さらには「自分史」へと継承され、小林多寿子の言葉を借りれば「綴る文化史³⁷⁾」の流れは続いてきたのである。また、「ふだん記」においては、文章を書くこととともに、その文章を出版し読まれることが重要な要素となっている。「書くコミュニティ」とともに「読むコミュニティ」が「ふだん記」の活動を支えてきた。その点、人の書いた「ふだん記」を読むという「読むコミュニティ」が三多摩においては長年の実践の中で形成される土壌があったことが大きい。また「自分史」の源流を考えるうえで、三多摩という地域における文化的な土壌、そこにおける「書くコミュニティ」と「読むコミュニティ」の形成は看過できない事象であるといえる。

第三として、橋本の学習論の根底に「書く思想」があることを明らかにした。本論文では、橋本の作品を学習論の観点から分析を行い、橋本の学習論は実践の中で確立してきたものであり、「私でも書ける、書けない者なし」、「下手に書きなさい」、「文章は手紙にはじまる」、「だれでも本が作れる」などの「書く思想」により成り立っていると論じた。

また「書く思想」について、万人教育主義、易行道主義、平等主義、地域主義を見いだした点も、本論文の成果として挙げておきたい。書けない人を書けるようにすることが、「ふだん記」の目的であったが、本論文では、こうした「書く思想」の根源に迫ろうと試みた。

四つのキーワードが示す姿勢を持ち得ていたからこそ、橋本は草の根の人々の書く実践において第二の生産者としての役割を果たし、人々の学びを支え、やがてその潮流が、全国的な「自分史」の発展へとつながっていったのである。

第四は、「自分史」の源流として「ふだん記」があることを再検証した点である。小林多寿子によれば、「ふだん記」運動は、「自分史」という言葉を誕生させ、「自分史」が後半に広がる素地を開拓した文章運動である（前掲『物語られる「人生」 自分史を書くということ』）。また、色川大吉の『ある昭和史』が「自分史」という概念を創出したこと、そして「ふだん記」を「自分史」という概念に連結させたことを、指摘している。

本論では、「ふだん記」と「自分史」で取り上げられている作品を対象として取り上げ比較しながら、「自分史」の直接の原型が「ふだん記」にあることを明らかにした。「ふだん記」では書き手が自身のことを書く際に、単に事実の羅列ではなく、自分の意見を書いたり、また社会的な事象と自分とを結びつけながら書くなど、「自分史」の作品に通じる点が

多々ある。その意味で「自分史」の源流は橋本の「ふだん記」にあることが再発見されたとも言えよう。

第五は、橋本が中心となって展開した「ふだん記」の活動を、社会教育史の中に位置づけて論じた点である。従来、社会教育の中では橋本の活動について、断片的な研究はあったものの、その業績に比して十分に系統的には論じられてこなかった。三多摩は戦後に限ってみても、60年代の三多摩テーゼ、あるいは国立公民館に代表される公民館活動など、社会教育実践の蓄積が豊富な地域である。しかしながら、どちらかという公民館活動を中心とする実践に目が向けられ研究も多く、橋本の「ふだん記」は、社会教育の領域において正面から論じられてくることが少なかった。

本論文においては、三多摩の地域社会教育史、社会教育実践史の中に位置づけて、橋本を中心とする「ふだん記」を論じた。そのことで、三多摩地域社会教育史を、より豊かなものとして描き出すことが可能となった。

本研究では、「自分史」の源流を三多摩における地域社会教育の歴史的な脈から探求してきたが、課題もまた残されている。

第一に、自らのことを文章に書いた人々は、その学びを経てどう成長していくのか、その側面を十分に展開できていない点である。本論文では、「ふだん記」を書く人々に焦点をあて、インタビューを行い文章の内容や書き手の変容を論じてきた。しかし、一部の人しか示すことができなかった。

今後、「ふだん記」だけに留まらず、80年代以降にブームとなっていった「自分史」などを含めて、書くことによって人は何を学び、変容し、成長していくのかに関する研究は課題の一つとして残されている。

第二の課題として、三多摩で展開された各々の実践の関係性や連続性、すなわち活動を牽引した人々の関わり合いや、周辺で参与した人々の接続などを必ずしも明確に示せなかったことである。本論文では、例えば書く実践が三多摩地域で発展したこと、なおかつ「ふだん記」と「自分史」の直接の関係を示すことはできた。しかし、こうした点への言及は限定的ともいえる。三多摩地域に展開されてきた多様な社会教育実践が、それぞれ直接にどのような関係にあり、いかにつながって来たのか、さらに資料を掘り起こし実証的に検証することもまた課題である。

第三は、「ふだん記」を、他の書く実践、たとえば1950年代の生活記録運動、さらに80

年代以降に書かれ始めた「自分史」の実践、そこから生み出された理論との比較検討を行いながらさらに精緻に検証していくことである。書く実践は、戦後日本の社会教育の中で重要な役割を果たしていくが、その中で、生活記録運動と「ふだん記」とはどのようにつながっていくのか。あるいは、「ふだん記」は、その後全国に普及していくが、「自分史」ブームとどのような関係で展開されていくのか、明らかにしていきたい。その上で、戦後社会教育の中で、書く実践が成人の学びにおいてどのような意味を持ってきたのか、人々はなぜ自分の人生の物語を紡ごうとしているのかを明らかにし、より豊かな戦後社会教育実践史を描きだすことを、今後の課題としていきたいと考える。

注

- 1 「日本社会教育学会第 64 回研究大会自由研究発表について」、日本社会教育学会第 64 回研究大会(埼玉大学)発表申し込み資料、2017 年。
- 2 大槻宏樹『近世日本社会教育史論』校倉書房、1993 年。
- 3 宮原誠一「社会教育本質論」、宮原誠一『宮原誠一教育論集』第 2 巻社会教育論、国土社、1977 年、pp. 15-24。
- 4 松田武雄『近代日本社会教育の成立』九州大学出版会、2004 年、pp. 6-8。
- 5 大槻宏樹他編著『自己教育論の系譜と構造—近代日本社会教育史』早稲田大学出版部、1981 年。
- 6 社会教育基礎理論研究会編『叢書 生涯学習』(全 10 巻、雄松堂)のうち II『社会教育実践の展開』(1990 年)、III『社会教育実践の現在(1)』(1988 年)、IV『社会教育実践の現在(2)』(1992 年)で取り上げられている。
- 7 例えば、『成人の学習としての自分史』(横山宏、1987 年)、『地域に生きるスポーツクラブ』(森川貞夫編、1987 年)、『公民館の再発見—その新しい実践』(小林文人、1988 年)、『平和学習入門』(藤田秀雄、1988 年)などがある。
- 8 戦後社会教育実践史刊行委員会編『戦後社会教育実践史』民衆社、1974 年。
- 9 同前、p. 1。
- 10 同前、pp. 27-137。
- 11 色川大吉『ある昭和史—自分史の試み』中央公論社、1975 年。
- 12 小林多寿子『物語られる「人生」 自分史を書くということ』学陽書房、1997 年。
- 13 鈴木政子『あの日夕焼け—母さんの太平洋戦争』立風書房、1980 年。
- 14 横山宏編著『成人の学習としての自分史』国土社、1987 年。
- 15 横山宏「まえがき」、同前、p. 2。
- 16 荒井隆「綴り学びあう『自分史』の実践」(同前、pp. 104-127)、佐直昭芳「草の根の語り手たち—昭島市高齢者教室文集『ほた火』の実践から」(同前、pp. 128-154)、宮澤郁子「女性と自分史学習」(同前、pp. 155-186)など。
- 17 おがわ・としお「女性 4 人 4 様の自分史を読む」、<月刊社会教育>37(3)、国土社、1993 年 3 月。手島勇平「奇遇にも戦後 50 年に高齢者の自分史づくり」、<月刊社会教育>40(6)、国土社、1996 年 6 月。吉沢輝夫「生涯現役論と自分史づくり」、<社会教育>53(1) 1998 年 1 月、全日本社会教育連合会。川又俊則「大衆長寿社会の自己表現-自分史と葬り方に見る」、<月刊社会教育>42(9)、国土社、1998 年 9 月。などがある。

-
- 18 添田祥史「識字教育方法としての自分史学習に関する研究-ナラティブ・アプローチからのモデル構築の試み」、〈日本社会教育学会紀要〉(44)、日本社会教育学会、2008年、pp. 41-50。
- 19 中澤智恵「私を書く 物語を書く」、赤尾勝己、山本慶裕『学びのスタイル生涯学習入門』玉川大学出版部、1996年、pp. 28-42。「ふだん記」に関して言及しており、まず書かせるようにする「ふだん記」創始者の橋本義夫の理念を明快であると評価している。
- 20 日本社会教育学会年報編集委員会編(委員長 三輪建二)『成人の学習』東洋館出版社、2004年。
- 21 色川大吉「現代の常民—橋本義夫論 昭和精神史序説」、〈中央公論〉89(8)、中央公論新社、1974年8月。
- 22 小倉英敬『八王子デモクラシーの精神史 橋本義夫の半生』日本経済評論社、2002年。
- 23 橋本鋼二『万人に文を 橋本義夫のふだん記に至る道程』揺籃社、2017年。
- 24 『「ふだん記」運動の展開過程と戦後のリテラシーの変容に関する実証的研究』、平成15-16年度科学研究費補助金基盤研究(c)(2)研究成果報告書(研究代表者 小林多寿子)、2005年。
- 25 小林多寿子「書く実践と自己のリテラシー」、桜井厚編『戦後世相の経験史』せりか書房、2006年、p. 240。
- 26 色川大吉『民衆史—その一〇〇年』講談社、1991年。
- 27 柳田國男『明治大正史 世相編』新装版、講談社、1993年、p. 3。
- 28 北田耕也『大衆文化を超えて 民衆文化の創造と社会教育』国土社、1986年。
- 29 同前、p. 12。
- 30 北田耕也監修、地域文化研究会編『地域に根ざす民衆文化の創造「常民大学」の総合的研究』藤原書店、2016年。
- 31 山崎功「東京・多摩における民衆の学習・文化活動」、同前。
- 32 例えば、第136号「近現代の多摩農業」(2009年11月)や第129号「かわりゆく駅風景」(2008年2月)では多摩の産業を取り上げており、第147号「多摩の小川」(2012年8月)では自然をテーマにしている。教育をテーマにした号もあり、一例を挙げると第125号「地域の教育力—寺子屋から学校へ」(2007年2月)のような地域教育を対象にした号や、第144号「戦後多摩の公民館活動」(2011年11月)、第120号「わたしたちの図書館・博物館」(2005年11月)のような社会教育をテーマにした号も発行されている。三多摩を長いスパンでとらえた特集としては、例えば第41号「多摩の大正時代」(1985年11月)、第72号「多摩百年—その歴史と未来—」(1993年8月)、第100号「二〇世紀の多摩」(2000年11月)などを挙げることができる。
- 33 多摩百年史研究会編著『多摩百年のあゆみ』けやき出版、1993年。
- 34 鈴木理生『多摩・東京—その百年』たましん地域文化財団、1993年。
- 35 松岡喬一著『多摩近現代史年表』たましん地域文化財団、1993年。
- 36 多仁照廣『若者仲間の歴史』日本青年館、1984年。多仁照廣『青年の世紀』同成社、2003年。
- 37 前掲『物語られる「人生」 自分史を書くということ』、p.53。